

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二
新橋演舞場別館
電話 (五四二) 五四七一番

清元協会

港区南青山二の十七の十三の一〇二
電話 (四〇二) 〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館
電話 (五七二) 〇二一六番

新内協会

品川区旗の台六の二十七の二
電話 (七八一) 三九五五番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六
電話 (四四四) 三〇二〇番

社団法人 長唄協会

新宿区高田馬場一の五の二一三三〇七
電話 (二〇八) 〇二〇七番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話 (五八五) 九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和五十四年二月二十五日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演
第二部 四時半開演 八時終演

'79 都民芸術フェスティバル

第九回 邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'79都民芸術フェスティバル参加公演(昭和53年度東京都助成公演)

種目	公演内容	会場	期 日	問 い 合 せ 先
オペラ	オッフェンバック「天国と地獄」	東京文化会館	1月16日・17日・18日	(414)5265 長門美保歌劇団
	マスカーニ「夫人フリッツ」		2月17日・19日・20日	(371)5384 藤原歌劇団
	清水脩「修禪寺物語」		2月27日・28日	(403)5516 日本オペラ協会
	ニコライ「ウィンザーの陽気な女房たち」		3月10日・13日・14日	(370)6641 二期会
ラ	マルタン「魔法の酒」	第一生命ホール	3月3日・4日・5日	(401)5856 東京室内歌劇場
	プリトゥン「カーリュウ・リヴァー」他	東京聖三一教会	3月19日～3月24日	(362)6921 東京オペラプロデュース
合唱	新星日響, 都響, 東響, 東フィル, 東京ソリスト N響, 日フィル, 新日フィル・日本プロ合唱団連合	東京文化会館	1月20日～3月12日	(567)7838 日本演奏連盟
	読売日響	立川市民会館	2月10日	
邦楽	第9回 邦楽演奏会	第一生命ホール	2月25日	(571)0216 邦楽連合会
新劇	森鷗外原作「阿部一族」	読売ホール	2月7日～2月17日	0422(43)1155 前進座
児童劇	コロディー原作「ピノキオ」	朝日生命ホール	1月6日・7日	(901)7694 劇団新児童
	さねとうあきら原作「くちなしほていどん」	足立文化会館 豊島公会堂	2月1日・2日・3日 3月29日・30日	(446)2287 劇団ひまわり
	小沢正原作「目をさませトラゴロウ」	朝日生命ホール 他	2月17日～3月18日	(314)3238 東京演劇アンサンブル
	雨宮すみえ作「くらやみに消えた鯉」	東京児童会館	3月10日・11日	(322)4378 いちょう座
バレエ	チャイコフスキー「白鳥の湖」※	立川市民会館 東京文化会館	2月3日・4日 2月9日・10日	(462)5524 日本バレエ協会
	チャイコフスキー「眠れる森の美女」	東京文化会館 東京郵便貯金ホール	3月26日 3月28日	(723)2356 東京バレエ協議会
現代舞踊	「風変りなキャラバン」「ボレロ」「塔」※	東京文化会館	1月31日・2月1日	(400)4541 現代舞踊協会
日本舞踊	第22回 日本舞踊協会公演※	国立劇場	2月15日・16日・17日	(533)6455 日本舞踊協会
能	都民能※	東京文化会館	1月27日	(574)6441 能楽協会
	翁付式能	観世能楽堂	2月18日	
民俗芸能	第10回 東京都民俗芸能大会(全席無料)	江戸川区公会堂 狛江市福祉会館	2月24日 2月25日	(212)5111(内)44-537 東京都教育庁文化課
都民寄席	第9回 都民寄席(全席無料)	立川社会教育会館 他	2月14日～2月23日	

※は無料招待有

全体についてのお問い合わせは東京都教育庁文化課

TEL. (212)5111 内線44-537へ

「邦楽演奏会」によせて

東京都知事 美濃部 亮吉



着し、参加作品も年ごとに厚みを増して、都民に喜びと期待をもって迎えられていることは、私にとっても大変にうれしいことです。

ちまたには冷たい不況風が吹き、人心・世相をひとしお暗いものにしていきます。そうであればなおのこと、都民のみなさんが日々の暮しのひとときをフェスティバルに過ごされ、心の憩いと励ましを受けとってほしいと思います。

例年どおり、このフェスティバルには多くの芸術家や芸術文化団体が、意欲にみちた参加をしてくれました。その一役を担ってくださった邦楽演奏会の、力一杯の活躍を期待しております。

今年もまた、都民芸術フェスティバルの季節がやってまいりました。

最高の芸術を最低の料金で、できるだけ多くの人々に鑑賞していただきたい———こういふ願いで始められたフェスティバルも、回を重ねて十一回目となりました。毎年冬から春にかけて催されるこのフェスティバルは、今ではすっかり都民の間に定

第一部番組(十二時半開演)

一、一中節 松の羽衣

浄瑠璃	宇治文彩	三味線	宇治文喜
同	宇治文美子	同	宇治文好
同	宇治博文	上調子	宇治紫松

二、長唄紀州道成寺

唄	芳村孝次郎	三味線	松永鉄五郎
同	杵屋六昶	同	松永和佐次郎
同	芳村伊十蔵	同	杵屋勝国
同	松永鉄庄治	同	松永鉄史郎

囃子

笛	望月長吉郎
小鼓	仙波宏祐
大鼓	仙波佐太
太鼓	仙波貴正

三、尺八鹿の遠音

尺八	荒屋夢童	尺八	大川豊童
佐怒賀崩童	和野日童	白井喬童	宮沢悟童
駒場鸞童	五月女朝童	山篠啓壽	真篠信壽
小森隆壽	小森隆壽	川真篠信壽	川真篠信壽
金森淡壽	金森淡壽	川真篠信壽	川真篠信壽

四、義太夫 傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段

お弓竹本 土佐廣	おつる竹本 土佐菊	三味線 豊澤仙廣
----------	-----------	----------

五、清元助

六（助六曲輪菊）

同	同	淨瑠璃	清元	梅波太夫	三味線	清元	益壽三郎
同	清元	登志男太夫	波栄太夫	同上	清元	高史三郎	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

六、新内蘭

蝶（若木仇名草）

同	淨瑠璃	鶴賀	加賀八太夫	三味線	富士松	菊三郎
同	鶴賀	梅寿太夫	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

七、三曲八

島

三	野	野	吉	福	清	大	小	尺
箏	坂	坂	村	田	田	竹	棕	八
絃	恵	恵	操	操	操	操	園	川
	子	子	紅	峰	峰	和		瀬
								順
								輔

八、常磐津宗

清（恩愛賸閑守）

同	淨瑠璃	常磐津	文字太夫	三味線	常磐津	文字兵衛
同	常磐津	須磨太夫	同上	同上	同上	同上
同	常磐津	八重太夫	同上	同上	同上	同上
同	常磐津	一三太夫	同上	同上	同上	同上
同	常磐津	同上	同上	同上	同上	同上

第二部番組（四時半開演）

一、長唄月の 卷（月雪花蒔絵の卮）

唄 柏 庄太郎 三味線 杵屋 六三郎
 同 和歌山 富司郎 同 杵屋 六六一
 同 今藤 佐太蔵 同 杵屋 六七一
 同 柏 庄一郎 同 杵屋 六七郎

囃子

笛 福原百之助
 小鼓 福原鶴太郎
 小鼓 福原鶴八郎
 大鼓 福原鶴七郎
 太鼓 望月太意次郎

二、地歌茶 音 頭

箏 大久保雅礼
 三絃本手 藤井久仁江
 同 太田久子
 三絃替手 富山清隆

三、義太夫新口村の段 傾城恋飛脚

孫右衛門 竹本越道
 梅川竹本春華
 忠兵衛 竹本駒竜
 捕手 竹本越若
 三味線 鶴澤三生

四、清元鞍馬獅子（夫婦酒替ぬ中仲）

浄瑠璃 清元清寿太夫 三味線 清元栄三郎
 同 清元栄志太夫 同 清元美多郎
 同 清元幸寿太夫 上調子 清元国太郎
 同 清元美好太夫

五、河東節 邯

鄂 (下の巻)

浄瑠璃	山	彦	節子	三味線	山	彦	貞子
同	山	彦	綾子	同	山	彦	光子
同	山	彦	ひな子	同	山	彦	絃子
同	山	彦	由記子	上調子	山	彦	康子

六、常磐津 将

門 (忍寄恋曲者)

浄瑠璃	常磐津	宮尾太夫	三味線	常磐津	菊寿郎
同	常磐津	千勢太夫	同	常磐津	菊雄
同	常磐津	初勢太夫	上調子	常磐津	一路郎
同	常磐津	光勢太夫			

七、新内花

井

お梅 (梅雨衣醉月情話)
(大川端)

浄瑠璃	富士松	長門太夫	三味線	新内	勝一郎
同	新内	勝英太夫	同	新内	勝史郎

八、三曲 春

の 曲

胡弓	山勢	松韻	箏本手	塚田	秀勢
箏替手	山勢	司都子		川口	隆勢
山勢	土田	紫勢		橋本	教勢
土田	島村	由勢		御木	遙勢
島村				柳	嶺千勢

歌詞と解説（演奏順）

（解説 竹内道敬）

第一部

一、一中節 松の羽衣

文化（一八〇四—一七）年中、初代菅野序遊作曲。能の「羽衣」を脚色したもので、誰でも知っている内容。天人が三保の松に羽衣をかけておいたのを、漁夫の伯竜が見つけ、家へ持って帰ろうとする。天人が返してくれと頼むが、伯竜は返さない。天人があまり嘆くので、伯竜は返してやるかわりに、天人の舞曲を舞ってくれように頼む。やがて天人は羽衣をつけ、東舞を舞いながら天へ帰って行くという筋。

長唄、常磐津、山田流等曲にも同じ題材を扱ったものがあるが、現存曲のなかでは、この一中節の曲がもっとも古いようである。

一中節というのは、元禄のころ京都で生れた浄るりて邦楽の中では古いもの。それがやがて江戸に移され、現在では都、菅野、宇治の三派がある。邦楽の古典といわれ、格調の高さ、素朴さを特色としている。

顔、へ雪を廻らす雲の袖、風の通り路霞みて初めて、馴れしみそらに立ち帰る、祝しの樂もとりどりに、波の鼓や松の琴、調べもともに声澄みて、しばしとどめよ乙女の姿、なおとどまりてその名さえ、常磐のかけと栄えつつ、羽衣の松若枝さす、君が御代こそ久しけれ。

二、長唄 紀州道成寺

能の「道成寺」は、非常に重い曲になっているが、歌舞伎では、そのはなやかなところだけを借りて舞踊劇として上演してきた。

ある女が寺へ来て、僧を欺いて舞を舞い、すきを見て鐘にとび入るといふ筋と、歌詞の一部分を借りて、娘心の華やかさ、女形の美しさをあらわす曲として、多くの作品が作られた。「京鹿子娘道成寺」はその代表といえるが、その後にも多くの作品が作られてきている。それが古いものほど能からはなれようとし、新らしいものほど、能に近い作詞、構成となっているのは、おもしろい特色といえよう。

この「紀州道成寺」は、文久元年（一八六一）三月、五世杵屋三郎助（のちの三世勘五郎）が作曲したもので、数ある「道成寺もの」の中ではもっとも新らしく、それだいてもっとも能に近い、筋がはっきりしている。曲も傑作で、ききどころ、きかせどころの多い曲といえよう。今日は時間の都合で、一部省略して演奏します。

二上りへげにのどかなる朝霞、富士を向かいに三保が崎、松原遠く海広く、三下りへ緑を浸す波の上、吹く春風の声につれ、虚空に響く物の音も、妙なる薫り花降りて、及びなき身の詠めにも、心空なる景色やな。本調子へ風誘う、雲の浮浪立つと見て、釣りせで人や帰るらん。

へこれはこのあたりに住む、伯竜と申す漁夫にて候、見渡せば、あれなる松に、美しき衣かかれり、取りて帰り、人にも見せ、家の宝ともなさばやと存じ候。

へのう、その衣は天人の羽衣とて、たやすく人に与うべきものならず、返し給えといえばえに、巖を撫ずる世のためし、聞き伝え給うらめ。

へそもこれなるが、天人の羽衣にて候かや、末世の奇特に留め置き、返しせじと引き取れば、へ今はさながら天人も、へ衣無くては羽抜け鳥、飛行の道も絶え果てて上らんとすれば翅なく、地に住む時は下界なり。詮方涙露の玉、かざしの花もうちしおれ、へ五衰の姿眼の前に、へ振りさけ見れば霞立つ、雲路の雁も声添えて、千鳥鷗の沖津浪、立つか帰るか、帰るか立つか、西も東も春吹く風の、空の便りもなつかしや、恨めしやとてうちかこち、嘆きいるこそ哀れなれ。

へあまりに見れば御痛わしく候ほどに、衣をば返し申そうずる間、かの天人の舞曲を奏で給うべし、されども衣を着給わば、そのまま天にや帰るべき。へいや、偽りは人間に有明けの、へ月の都の掟とて、日々夜々の勤め事へわれも数ある天乙女、羽衣軽く着なしつつ、仮りに吾妻の駿河舞。へ霓裳羽衣の一節も、へ雨にうるおう花の

25字

へそもそも紀州道成寺と申すは、道成の卿承り、始めて伽藍橋の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名付けたり。へ知るべの道はこなたぞと、和光同塵結縁の、俱に進むる仏法衆生、救わせ給う法の声、章願誓志煩惱の、作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に参らんと、月は程なく入汐の、煙満ち来る小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺にぞ参りける。

へあれにまします宮人の、烏帽子をしばし仮に着て、すでに拍子をすすめけり。へ仇し身の、雪にそぼふる春の雨、花に柳の綾錦、時の調子をとりどりに、わが妄執の消えぬやは、濁りに澄みて月清み、浮いて変るの世の習い、無明の夢も邯鄲の、枕にさとし五十年、かざしの袂ひるがえし、おりそえ紛うその風情、一節かなで面白や。へ花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れ初めて鐘や響くらん、山寺のや、へ春の夕暮来て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。入相の鐘に花ぞ散りける、花ぞ散りける。へ去るほどにさるほどに、寺々の鐘、月落ち鳥啼いて、霜雪天に、満汐程なく日高の寺の、江村の漁火、愁いに對して、人々眠ればよきひまぞと、立ち舞うようにねらい寄って、撞かんとせしが、思えばこの鐘怨めしやとて、竜頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、引きかずいでぞ入りにける。

へこの鐘について、女禁制のその謂いを、語るもなかなか哀れなり。へむかしこの里にまなごの庄司という者、一人の息女あり、またその頃奥より熊野詣での先達のありしが、年々、庄司が許を宿として来ぬるに、何時か娘と逢瀬ごと、草の枕の露しげみ、わが濡衣を身にまとい、

離れはせじと一筋に、女子心はさがなけれ。恋に修行の二つ道、迷うはつらし迷わねば、神慮恥かし山伏の、かえやもなしとねを逃れ、足も空なる道遠み、かの女は山伏を、遁さずまじと追つかくる。折しも増さる水の面に、渡りかねたる日高川、さすがに思いも浦波に、浮きつ沈みつ恋い慕う、女の一念毒蛇となつて、やすやすと泳ぎ渡り、この寺の外に忍ばん蔭もなし、下りたる鐘を怪しみて、竜頭をくわえ七まとい、まといまとい胸の火に鐘は湯となり山伏は、終に失せにけり。へその時の執心残つて、障壁をなすこそ恐ろしけれ。へ水かえつて日高河原の、真砂の数は尽くるとも、行者の法力尽くべきかと、皆一同に声をあげ、丹誠こらして念じける。

へ東方に降三世明王、南方に軍荼利夜叉明王、西方に大威徳明王、北方に金剛夜叉明王、中央に大日大聖不動明王、聴我説者、得大智恵、知我身者、即身成仏と、祈り祈られ、撞かねどこの鐘響き出で、ひかねどこの鐘躍るとぞ見えしが、程なく撞楼に引き上げたり、あれ見よ蛇体はあらわれたり。

へ謹請東方清竜清浄、謹請西方白体白竜、謹請中央黄体黄竜、一大三千大千世界の恒沙の竜王、哀愍納受、哀愍自謹のみきんなれば、いずこに大蛇のあるべきぞと、祈り祈られかつばとまろぶが、また起き上つてたちまちに、鐘に向かつてつく息は、猛火となつてその身を焼く、日高の川波深淵に飛んでぞ、入りにける。望み足りぬと驗者達、わが本坊にぞ帰りける。

三、尺八鹿の遠音

琴古流に伝わる古典本曲（尺八だけの曲）を代表するもの一つで、今日ではもつともポピュラーな曲として演奏される。その理由として、古典本曲は、宗教的な教義やしきたりから生れたものが多く、その中で、純音楽的に作曲されている数少ない曲の一つであるということ、また、演奏形式が一部・二部の尺八が互いに掛合といううおもしろ味のある形式で演奏されているということがあげられる。

内容は曲名のしめす通り、秋の静寂な深山の情景と、あたかも雌鹿を慕つて、深く谷間にこだまする雄鹿の遠啼きするさまが、尺八の音によって描写されている。

ふつう、二名二管の掛合いで演奏されることが多いが、今回は多人数の掛合いによって、音量の変化をつけて、ふだんではきかれない演奏効果をあげるよう、試みてみました。

（童門会）

四、義太夫 巡礼歌の段

傾城阿波の鳴門

近松半二、八民平七らの合作で、明和五年（一七六七）

六月、大阪竹本座初演。近松門左衛門の「夕霧阿波の鳴渡」の改作というが、そのおもかげはほとんどない。夕霧伊左衛門の話に、玉木家（実は伊達家）のお家騒動、阿波の十郎兵衛の巻説をとり入れた十段に及ぶ時代物。しかし、初演以後は第八段の十郎兵衛内、通称「順礼歌の段」がもつとも名高く、この段だけがくり返し上演されている。芝居でも通称を「どんどろ」といつて、やはりこの場面だけが上演される。なお「どんどろ」とは「土井殿」の転化で、お弓、おつるの悲しい場面はあまりにもポピュラーである。

へ故郷を、はるばるここに紀三井寺、花の都も近くなるらん。

「巡礼に御報謝」と、いうもやさしき国説、てもしおらしい順礼衆、「どれどれ報謝進じよう」と、益に精米の志。「あいあい、ありがとうござります」と、いう物腰から爪はずれ、可愛らしい娘の子、定めて連衆は親御たち、国はいずくと尋ねられ、「あい、国は阿波の徳島でござります」。「むむ、何じや徳島、さつてもそれは、まあなつかしい、わしが生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に巡礼さんすのか。」「いえいえ、その父様や母様に逢いたさ故、それでわし一人西国するのでござります」と、聞いてどうやら気にかかる。お弓はなおもそばに寄り、「む、父様や母様に逢いたさに西国するとは、どうした訳じや、それが聞きたい。まあその親たちの名は何というぞいの。」「あい、どうした訳じや知らぬが、三つの年に父様も母様も、わしを婆様に預けて、どこへ

やらいかしやんしたげな。それでわたしは、婆様の世話になつていたけれど、どうぞ父様や母様に逢いたい、顔が見たい、それで方々尋ねてあるくのでござります。父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します」と、きいてびっくりお弓はとりつき、「これこれ、あの、父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つ年別れて、婆様に育てられていたとは、疑いもないわが娘」と、見れば見るほど幼な顔、見覚えのある額の黒子（ほくろ）、やれ我が子かなつかしやと、いわんとせしがいや待てしばし、夫婦は今もとらるる命、元より覚悟の身なれども、親子といわばこの子にまで、どんな憂目がかかろうやら、それを思えばなま中に、名乗り立てして憂目を見んより、名乗らでこのまま帰すのが、かえつてこの子がためならんと、心を鎮めよそよしく、「おお、それはまあまあ、年はも行かぬにはるばるの所を、よう尋ねに出さしやつたのう、その親達が聞いたなら、さぞ嬉しゅう嬉しゅうて、飛び立つようにあるうが、ままならぬ世のうきふし、身にも命にもかえて、可愛い子をふり捨て、国を立ち退く親御の心、よくよくの事であろうほどに、むごい親と必ずかならず恨まぬがよいぞや。」「いえいえもつたない、何の恨みましよう、恨むる事はないけれど、小さい特別れたれば、父様や母様の顔も覚え。よその子供が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あのように髪結うて貰おうものと、うらやましゅうござんす。どうぞ早う尋ねて

逢いたい、ひよつと逢われまいかと思えば、それが悲し
ゆうござんす」と、泣いじやくりするいじらしさ。母は
心も消え入る思い。「さてもさても世の中に、親となり
子と生るるほど、深い縁はなけれども、親が死んだり子
が先立つたり、思うようにならぬが浮世、こなたもどれ
ほど尋ねても、顔も所も知らぬ親たち、逢われぬときは
詮ない事、もう尋ねずに国へ往んだがよいわいの。「い
えいえ恋しい父様や母様、たとえいつまでかかってなど
尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅じやてて、どこ
の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人
の軒の下に寝て、はたかれたり、怖い事や悲しい事、父
様や母様と一緒にいたりや、こんな目には逢うまいもの
を、どこにどうしていやしやんすぞ、逢いたい事じや逢
いたい」と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまり
かね、「おお道理じや、可愛いやいじらしや」と、われ
を忘れて抱き付き、前後正体歎きしが、これほど親を慕
う子を、何とこのまま去なされよう、いつそ打ち明け名
乗ろうか、いやいやそれではこの子も同じ罪、その時の
悲しさを思い廻せば去なすが為と、

「段々の様子を聞き、我が身のように思われて、悲しい
とも情ないとも、いうにいわれぬ事ながら、とかく命が
物種、まめでさえいりや、また逢われまいものでもない。
これ、しつけぬ旅に身をいたため、煩らいでも出りや悪い。
どこをしようどに尋ねうより、その婆様の方へ去んでい
ろとの、おっつけ父様や母様が、逢いに行てじやほどに、
悪い事はいわぬ、思い直してこれからすぐに国へ往んで、

筋、名残惜しげに振り返り、どこをどうして尋ねたら、
父様や母様に逢われることぞ、逢わしてたべ南無大悲の
観音様、へ父母の、恵みも深き紛川寺、仏の誓い頼もし
きかな、泣く泣く別れ行く跡を、見送り見送り延び上り、
「これ娘、ま一度こちら向いてたも、せつかく長の海山
越え、艱難してあこがれ尋ねるいとし子に、不思議と逢
いは逢いながら、名乗らで去なす母が気は、どのよう
にありうと思ふ、狂気半分半分は死んでるわいの、まだ
長生きのある子をば、親故路頭に立たすか」と、そのま
まそこにとどくと伏し、消え入るばかり嘆きける。

五、清元助 すけ 六 ろく (助六曲輪菊)

「助六」といえば、河東節の「助六」が有名だが、河
東節は歌舞伎十八番の一つとして、市川家上演のときし
か演奏されない。これでは不自由なので、市川家以外の
俳優が助六に扮したとき、他の浄瑠璃で演奏するようにな
っている。

清元のこの「助六」は、六世尾上菊五郎が大正四年四
月、東京市村座で初めて助六を演じたとき、五世清元延
寿大夫が作曲したもの。全体が河東節のそれと似ている
のは当然のことだが、へせくなせきやるな」が三下りに
なっているのが特色。上品な中に清元らしい特色が十分
にあらわれており、河東節とはちがった楽しさがある。

へ鐘は上野か浅草の、名もなつかしき花川戸、よしやか
わせし越し方を、思い出見せや清搔(すががき)の、音
締めの際に招かれて、間夫が名取の草の花。へ思い染め

ずいぶんまめで親たちの尋ねて行かしかるを待つている
がよいぞや」と、なだめすかすをききかけて、
「あいあい、忝のうござります。お前がそのようにいう
て泣いて下さりますよ、どうやら母様のように思
われて、わしやここが去にとむない。どんな事なとい
たしましうほどに、申しお家さま、お前のおそばにい
つまでも、わたしを置いて下さりませ」。

「ええ、悲しい事をいい出して、また泣かすのかいの、
さつきにからわしも子のように思つて、ここに置きたい
去なしとむないと、さまざま思い廻せども、ここに置
てはどうもためにならぬ事があるによつて、それでつれ
う去なすのじやほどに、ききわけて去んだがよいぞや」
いいつつ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを喜ぶ
はなむけと、紙に包んで持つて出で、

「これ、何ば一人旅でも、たんと銭さえやりや泊める。
わずかなれども志し、この銭を路銀にして、早う国へ去
にや、必ずかならず煩ろうてばしたもんな」と、銀を渡
せば押し戻し、

「嬉しゆうござんすれど、銀は小判というものを、たん
と持つております。そんなりやもうさんじます。忝うご
ざります」と、泣く泣く立つをひきとどめ、
「それはそうでもこれはわしが志し」と、無理に持たし
て塵打ち払い、

「これもう去にやるか、名残が惜しい、別れとむない。
これ今一度顔を」と引き寄せて、見れば見るほど胸せま
り、離れがたなき憂き思い。それと知らねどまことの血

たる五つ所、紋日待つ日のよすがさえ、子供が便り待合
の、へ辻占茶屋に濡れて寝る、雨の三の輪の冴え返る。
へこの鉢巻の御不審か。へこの鉢巻は過ぎし頃、由縁の
筋の紫も、君が許しの色見えて、移り変らぬ常磐木の、
へ松の刷毛先透き額、堤八丁風誘う、目当の柳花の雪、
傘に積りし山間は、へ富士と筑波をかざし草、草に音せ
ぬ塗鼻緒、へ一つの印籠一つ前。三下りへ急くな急きやる
なサヨエ、浮世は車サヨエ、本調子へ巡る日並の約束に、
籬へ立ちて音づれも、果ては口舌のありふれた、手管に
落ちて睦言の、なりふり床し君床し。へ君なら君なら。
へしんぞ命を揚巻の、これ助六が前渡り、風情なりける
次第なり。

六、新内蘭 らん 蝶 ちょう (若木仇名草)

新内節の代表曲。初世鶴賀若狭掾の作曲で、新内節と
いえばこの中のクドキへ縁でこそあれ」が、その代名詞
となるほど知られている。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振師は、榊屋の此糸とな
じみを重ね、女房のお宮が身を売った金まで入れあげて
しまふ。お宮は客となつて此糸に逢い、蘭蝶との夫婦の
成り立ちを語り、蘭蝶と縁を切つてくれ、別れてくれと
頼む。此糸はお宮の真実をうたれ、縁を切ることを約束
する。その様子を隣の部屋で聞いていた蘭蝶は、此糸の
本心は死ぬ覚悟であろうと察し、結局、お宮の願いも空
しく、二人は心中してしまふ。

全曲を演奏すると一時間以上かかる大曲なので、その中のもっとも知られているところへ縁でこそあれ」のお宮のクドキを中心に演奏する。なおへああ嬉しやと思うたは……」の三味線の手が、いわゆる新内流しの手に應用されているので、あわせてきいていただきたい。

へ引け過ぎの、廊下を伝う足音も、小耳にさわる夜廻りの、声さえつらき永の旅、お宮は心やすらうて、しばし座敷に待ちいたる。へのれん押しあけ此糸は、へ縁でこそあれ末かけて、約束固め身を固め、世帯かためて落付いて、ああ嬉しやと思うたは、ほんに一日あらばこそ、そりや誰ゆえじやこなさんゆえ、大事の男をそのかし、夜昼となく引き付けられ、商売事は上の空、ひいきで呼んで下さんす、馴染のお客茶屋衆も、来る度毎にまた留守かと、愛想つかされ後々は、呼んでくても内証の、つまりつまって妾が身を、売って渡したその金を、またこなさんに入れあげられ、嬉しかりうかよかろうか、腹が立つやら口惜しいやら、食い付きたいほど思うたは、今日まで日には幾度か、その恨みを打ち捨てて、互いのための心底話。

七、常磐津 八 島

能の「八島」は、ワキ僧が義経の亡霊に逢って、屋島合戦の物語をきくという内容だが、その歌詞の後半に手をつけたもの。

明和・安永（一七六四～八〇）ごろ、名古屋の藤尾幻当が作曲したもので、数少ない戦記物の一つ。へまた修羅道の」以下は能の歌詞そのまま、源平の合戦のありさまをうたう。

地歌舞としてもよく上演される曲で、萩江節ではこの歌詞はもとより曲までも大部分そのまま移してうたっている。

はじめは地歌三絃曲だったが、早くから箏の手がつけられ、箏曲として三絃と箏の合奏形式で伝えられてきた。今回はそれに尺八を加えて三曲合奏で演奏する。

へ釣のいとまも波の上、霞渡りて沖行くや、海士の小舟のほのぼのと、見えてぞ残る夕暮に、浦風さえものどかにて、しかも今宵は照りもせず、曇りもやらぬ春の夜の、朧月夜にしくものはなし。

へ西行法師の嘆けとて、月やは物を思わする、闇は忍ぶによかよか、うななせ出たぞ、来そ来そ曇れ。

へまた修羅道の鬨の聲、矢叫びの音震動して、今日の修羅の敵は誰そ、何、能登守教経とや、あらものものしや、手なみは知りぬ、思いぞ出する檀の浦のその船軍、今は早や、闇浮にかえる生死の、海山一度に震動して、船よりは鬨の聲、陸には浪の楯、月に白むは剣の光、潮に映るは兜の星の影、水や空、空行くもまた雲の波、打ち合え刺し違うる、船軍の駆け引き、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて、敵と見えしは群れいる鷗、鬨の聲と聞こえしは、浦風なりけり高松の、朝嵐とぞなりにける。

八、常磐津 宗 清

おんあいひとのせきりり
(恩愛贖関守)

悲劇の武将、源義経を主人公にした作品は数多く作られ、邦楽・邦舞の世界には「判官もの」という分類がある。それらの中でもっとも義経が幼ないのがこの作品。

源義朝の没後、その愛人常盤御前が、今若、乙若、牛若の三人の子を連れて諸々をさまよひ歩くうち、山城の国木幡の関に来かかる。折からの雪の中、関守の宗清にみとがめられ、子供たちを助けるために操を破り、清盛にしたがうことになるという、雪中問答の場面。

宗清が主人公で、ちょうど「勸進帳」の富樫のような心持と、常盤御前に対する同情心、それにほのかな色気が必要とされるので、常磐津のなかでも難曲といわれている。

文政十一年（一八二八）十一月、江戸市村座で初演の「賁之雪源氏最眞」の二立目に初演された。奈河本助作詞。三世常磐津小文字太夫、五世岸沢式左ほかの出演だった。なお舞踊会などでは、この場面は少し陰気だというので、「鞍馬山」をつけて、この場面を牛若丸の見た夢だったとするむきもある。

へ君命受けて宗清は、身をかたいとの夜の関、守れば敵も夜嵐も、やたけ心の矢屏風に、隔てきびしき板廂。へ降つたる雪かな。野も山も皆白妙と、いつか頭に積もる雪、寒さに負けぬ宗清が、六波羅よりの上意を受け、左馬頭（さまのかみ）が枝葉の子供、見つけ次第に首打

とと、清盛公のきびしき掟、その制札に、松を手折つて松を助くと、内府重盛殿の詞を賜うは、なにさま心ありげな御掟、とにもかくにも関守は、話相手のないので退屈、睡魔をさけるこの兵書、治世に乱の忘れぬため、かの孫康が雪あかり、どりや友人を聞いて見ようか。へ故郷を出でしにまさる涙かな、夢に別るる枕とは、げに定家が詠み歌も、へ身に呉竹の伏見なる、しるべの方を尋ねんと、紫竹を出でてあとや先、へ歩み習わぬ道芝の、雪の剣に裳裾さえ、紅さそう照草の、今ははかなき常盤の前、痛わしや今若と、乙若君を両袖に、包めど余る憂き事の、世を牛若は懐に、凍る乳房を抱き寝の、へ顔を見るさえいとどなお、歩み疲れておわしける。へ母様危のうござります。必ず怪我して下さるなや。へおお今若よういうてたもつた。紫竹の里を出でしより、たよりに思うはそなたばかり、思えば昨日は昔にて、鏡が石に影頼み、三人の子供は儲けても、御運つたなき源のこの行末、必ず平家の武士に、見咎められぬようにしてたもや、とこういううち伏見へも間もない。二人とも辛抱して歩いてたもや。へいえど乙若頑是なく、へもう歩くのは、いやいやいやいや。へこれはまたどうしたものの、今にねんねをさすほどに、ききわけて歩くものじや、それ見や、向うが雪明かりで、鳥羽の繩手や、木幡の里。へやがて木幡の山越えて、馬はあれどもかはだし、君を思えば行くぞとよ、歩くものには花紅葉、花の手車手をひいて、へ歩みかかれれば雪風に、笠をとられて突く杖の、雪に涙も玉銚の、その道もせを行き悩む。へやあ、夜中といひ怪しい女、幼な子を大勢連れ、この

関を越す気であろうが、ここは木幡の関。へ義朝が残党詮議のため、宗清殿のきびしい固め、さあ、ありように名乗って通れ。へさあ、妾はもと都の市人、伏見のあたりへしるべあつて、尋ねるうちにこの大雪、二人の子供に道はか行かず、思わずも日を暮らしたり。どうぞ情にこの関を、へやあ、そう吐かすほど、なお怪しい。さあ女めと立ち上れば、へやれ待て兩人、聞けば子供を連れられた女とな、源氏の余類に似合いの註文、身がじきじきに糺してくりよう。

へ何か思案の宗清が、氷る足駄に善悪の、邪正の道を踏み分けて、関のとぼその庭伝い、へ賤しからざる上臈の供をも連れずただ一人、見れば幼ない子供を連れ、はてあてやかな、へきつと眺めていたりしが、へこりやこりや女よく聞けよ、今四海ようやく穏かなるも、先だつて滅びたる、左馬頭義朝、大勢の子供あつて、所々方々に漂泊なし、ことに五条の雑仕常盤が腹には、三人の男子あるよし、生け置いては後日のため、見つけ次第に首打と、新たに立てしこの関所、この宗清が眼力に、一目見たればのげはない。常盤なりと白状いたせ。

へ様子問われて塞がる胸、へほほ、そんなら三人の子供がある故に、さあその疑いも子供ゆえ、子のある女はいづくにも。へああ、いわれなそのいいわけ、子供のことはさておいて、いわずと知れた芙蓉のまなざし、国色のきこえある常盤御前、外にあらうはずがない、身が引つ立てて福原殿へ。へすりや妾をどうあつても、ほんに思えばこの身のぬれぎぬ、是非もなき世の有様じやなあ。へこりや者共、大事の落人、関所の庭へ。へさあ女め、

第二部

一、長唄月の巻

(月雪花蒔絵の卮)

文政十年(一八二七)三月、江戸市村座初演。二世桜田治助作詞、四世杵屋六三郎作曲。「月雪花蒔絵の卮」という三変化舞踊の上の巻だった。なお、ついでに記すと雪の巻は清元で「納豆売り」、花の巻は長唄で「草摺引」だったが、花の巻は廃曲。

月の名所であり、歌枕としても知られている野路の玉川を背景に、御殿女中と仕丁二人が踊ったもの。ごくふつうの歌詞だが、掛け言葉に巧みで、秋の花尽し、虫尽しあたりがおもしろく、二上りになってからは、当時流行の小唄をとり入れて、軽快な気分させる。

へ井出の山吹……へ鎌倉見たか……へ今年や世がよい……へ可愛がられて……などがそれで、当時の世相がしのばれる。

なお冒頭の句は「明日も来ん、野路の玉川萩こえて、色なる波に月やどりけり」というので『千載集』巻四にある源俊頼の歌である。

立とう。へ是非なくもあらしこに、引つ立てられて常盤御前、へ隙間もあらば遠近の、たつきも知らぬ関の庭、巢をはなれたる鶯の、へ吹雪に迷う風情なり。

へもうこうなつては籠中の鳥、逃ぐるると逃しはせぬ。しかし一人ならず三四人、思えばふびんな事でもあり、お幸いさいわい。へうしろに立ちし高札の、雪打ち払い文字のあや。へこれはを見よ、この高札に松を手折つて松を助く、へ操にかけしことばづめ、返事を松の高札に、手折るともまた助くるとも、へこの宗清へ仰せなれど、へ生けてはおけぬ落人の、へ素性を明かして助かるか、いやさもし常盤なら手にかける、また松ならば助けるとも、思案きわめて返答いたせ。へさあそれは、へさあさあ。

へなるほど妾こそその常盤、とても叶わぬこの身の行末、さあいさぎよう手にかけて。へおよい覚悟、観念なせ。へ抜き放したる氷の刃、峯の吹雪に照りさそう、光は夜半の月代と、見紛ううちにこわいかに、刃物はそれで谷影の、岩の間に雪散つたり。

へやや、そりや自らを助けんとて。へ松を助くる制札の、掟きびしき清盛殿、松の操を破れという、謎がとければその松の、雪もとけよと君の厳命。へすりやその松に松の操を、へ色かえぬ松、色かえる松、へして三人のこの子供は、へ小枝もともに、へ雪を払うて、へすぐさまこれより、ささ参ろう。へいざ御供と宗清に、助けられたる幼な子の、その源は谷の音、峰のこだまとおとづれて、南柯の夢と覚めにける。

へ野路の玉川萩こえて、色なる浪と読人の、俊頼卿にひきかえて、いざよう月のしなものに、冴えた仕丁の立栄え。へ水の鏡に影宿る。姿をここに狩衣の、へ主やゆかしと振袖に、包む思いのとけしなく、結ぶの神に願ぎ事と、掛け奉る白張りに、烏帽子も気軽気さく者、今日のお出では紺屋の使い、とはどうでんす、色の事じやととつて、おおさてそんならあさつてか、はてそうであろ、そうかいな。忍び詣での帰り路も、へ隈なき夜半に雁金の、薄墨に書く玉章と、誰がいう紅葉織り映えて、秋野の錦いろいろの、色を染めなす立田姫、姿もさぞな朝顔の、さす手ひく手に小車の、花を廻らす舞い扇、返す袂をちよと男郎花、何を紫苑の仇心、萩の浮気につい招かれて、薄に露のこぼれ萩、うらやまし、へ千種結びにこちやよい殿と、縁し定めて二世かけ香の嬉しさに、長柄の蝶の妹背ごと、いつかいつかとそのひぐらしを、へ待つに松虫やるせがのうて、もしや夢にも君こおろぎと、へ中で蛍の焦がれていなご、きりぎりす、へ寝もせで賤の遠砧。

二上りへ井出の山吹蛙がなぶる、さつきそつこでどうじやいな、廻る津の国卯の花薫る、月が啼いたかほととぎす、武蔵が調布野路の萩、野田に千鳥よそれ高野じや。飲めぬ水。へ鎌倉見たか江戸見たか、江戸は見たれど、鎌倉名所まだ見ない、派手を振袖それそつこが花じやもの。へええそちらまで憎らしい、てもさつても和御寮は、誰の神の御胤にて、天官かつらをしゃんと着て、踊る振り

が見事え、吉野竜田の花よりも、紅葉よりも、恋しき君が殿づくり、萩の枝折をしるべにて、いざやとあるを止むる袖、ふりきり原の駒ならで、心の手綱一節に、月の玉銚あとにとほんときりやどうじや、あいつ一人で取りもちを、科戸の風に入船は、しかも常陸の鹿島浦、これわいな。へ今年や世がよい豊年で、米が十分色事も、ほうやれほう、穂に穂が咲くといな、おやもさもさやあ対の定紋、どうしたひよりのひょうたんで、よいよい恋を知らざる、鐘撞く野暮めは西の海、やれこれそこらでこれわいな、へ可愛いがられた竹の子も、今は抜かれて剥かれて、桶のたがにかけられてしめられた。へしめろやれ、やれこれわいな、面白や、へその戯れに興まして、また明日も来ん名所の、眺めにあかぬ風情かや。

二、地歌 茶ちゃ 音おん 頭ど

茶の湯の道具や、茶室に閑することばに因んだ文句をつらねて、男女の仲を歌った曲。もと横井也有作、伊勢屋三保曲の「女手前」という地歌の文句を縮めて、新しい曲をつけたもの。「茶の湯音頭」ともいう。

菊岡検校が三味線曲として作ったのに、八重崎検校が替手風の箏の手をつけた。三味線は前唄が六下り、後唄

度笠」に改作、それにさらに原作を参照してまとめ上げた作品。

新町樋屋の遊女梅川と、亀屋忠兵衛は相愛の仲。恋敵の丹波屋八右衛門にのしられた忠兵衛は、行きがかり上、公金三百兩の封印を切つて梅川を身請けする。(ここが封印切り) そのあとがこの場面でお尋ね者になった忠兵衛は、梅川と故郷の新口村へおもむき、実父の孫右衛門によそながらの別れを告げ、裏道から逃げて行くというところ。

へ落人のためかや今は冬枯れて、すすき尾花はなけれども、世を忍ぶ身のあとや先、人目を包む頬かぶり、隠せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、労わる身さえ雪風に、凍える手先懐に、暖められつ暖めつ、石原道を足曳きの、大和はここぞ故郷の、新口村に着きけるが、(中略)へ孫右衛門は老足の、休み休み門を過ぎ、野口の溝の薄氷、滑るをとまる高足駄、鼻緒は切れて横ざまにどうと転べば、「南無三」と忠兵衛もがけど出られぬ身、へ梅川はあわて走り出で、抱き起しつ裾絞り、「申し申しもうし、どこも痛みはいたしませぬかえ。お年寄の危ないこと、おおま危ないこと、お足も洗い鼻緒も上げて上げましょう、まあまあこちへ」と手を引いて、うちへ伴い上り口、腰膝撫でて労われれば、孫右衛門は気の毒さ、

「ああ戴きますいただきます。どなたか知らぬがかたじけない。おかげで怪我もいたしませなんだ。ああ、若い女中のおやさしい。もうもう手を洗わしやうて下さりませ。はてまあ、手を洗わしやうて下さりませ。さいわい

は三下りになっているが、六下りの最初の曲らしいという説がある。
いわゆる手事物形式の曲で、前唄―手事―後唄という構成で、前唄の前に短い前弾がついている。また中間の長い手事は、さらに三部分に分かれ、手事―中散らし―本散らしから成り立つ。

この曲を伴奏のように使つて茶の湯を立てることがあるが、これは踊りの伴奏のようなきまりがあるわけではなく、細かい動作との関連はうすい。気分的なものだが、何となく奥床しく楽しく感じられるのは、歌詞によるのだろう。

へ世の中に、勝れて花は吉野山、紅葉は立田茶は宇治の、都は辰巳それよりも、里は都の未申(ひつじさる)、数寄とは誰が名に立てし、濃茶の色の深緑、松の位にくらべては、かこいというも低けれど、情は同じ床飾り、飾らぬ胸の裏表、帛紗捌けぬ心から、聞けば思惑違い棚、逢うてどうして香管の、柄杓の竹は直ぐなれど、そちは茶杓の曲み文字、憂さを晴らしの初昔、むかし話の爺婆となるまで釜の中冷めず、縁な鎖の末永く、千代萬代え。

傾城恋飛脚

三、義太夫 新にの 口くち 村むら の 段だん

安永二年(一七七三)十二月、大阪豊竹座初演。菅専助、若竹笛躬の合作。

近松門左衛門の「冥途の飛脚」を、紀海首が「傾城三

庭に薬は沢山、鼻緒はわしがすげます」と、延紙引きさくその手元、不思議そうにうちまもり、「どなたなればこのように、ねんごろにして下さります」と、顔つれづれと眺むれば、梅川いとど胸つぼらしく、「はい、私はいやあの旅の者、わたしの舅の親父さま、丁度お前の年配で、恰好も生写し、ほかの人にする奉公とは、も、さらさらもって存じませぬ。さぞ連れ合いは飛び立つ、さ飛び立つようにござりませぬ、が、その紙とこの紙とかえて私が申し受け、連れ合いの肌につけさせて、父御に似た親父様の形見にさせとうござんす」と、塵紙袖に押し包む。涙にそれ知られけり。

詞のはしに孫右衛門、さてはそうかと恩愛の、尽きぬ涙を押し隠し、

「ふう、こなたの舅にこの親父が似たというての孝行か、ええ嬉しゅうござる。(中略)これは京の御本寺様へ、上げようと思つた金なれど、嫁と思つてやるではない。ただ今のお礼のため、これを路銀にちつとなど、遠い所へ行て下され」と渡せば、梅川押しいただき、

「お心付いたこのお金、さかさまながらいただきます。大坂を立ち退いても、私が姿目に立てば、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日あまりに四十両、使い果して二歩残る、金ゆえ大事の忠兵衛さん。科人にしたも私から、さぞ憎かろうお腹も立とうが、因果づくにあきらめて、おゆるしなされ下下さりませ。親子は一世の縁とやら、この世の別れにたつた一目、逢うて進せて下さりませ」と、奥の障子を明

けるを引き止め、(中略)

「これこれ女中、あの物音はたしかに捕手、この裏道の小川を渡り、藪を抜ければ御所街道、ささ早う早う」と気をもむところへ、巡礼姿の八右衛門、利平もともに蚤取眼、役人大勢打ち連れ立ち、

「このうちがきぶさいな」と、どかどかと入るところへ、組子一人かけ来り、

「ところは長谷の山続きに、梅川忠兵衛と名乗る者、休みおつたと追つ取り巻き、からめ捕らんといたせども、なかなか手に合い申さず」と、聞くより小頭、「さてこそさてこそ、来り続け」と引返せば、二人もともに飛んで行く。

へ孫右衛門は飛び立つ嬉しさ、「天の助けかかたじけない」と、裏道見やうて伸び上り、「おおそうじやそうじや、その道じや、それぞれの藪をくぐるなら、切株で足突くな」と、届かぬ声も子と思う、平沙の善知鳥血の涙、永き親子の別れには、安方ならで安き気も、涙、涙の浮世なり。

四、清元鞍馬獅子

(夫婦酒替ぬ中仲)

義経が殺されたと、悪人共にいわれた静御前が、狂気し、父の形見の薙刀を持ってさまよい歩く。雪中に伊勢の御裳裾川のあたりへ来かかると、そこで太神樂(実は

所は伊勢の神、神風につれて聞こゆる神樂歌。

太神樂へ悪魔を払って、そつこでせい。

へ諸国巡りに、天照らす。神を商うすぎわいに、襟にかけたる曲太鼓、頭に獅子の二人前、一つによせて、打つたり、舞うたり、月の朔日(ついたち)十五日、大晦日も元日も、股引がけの旅神樂、われと浮かれる道草に、獅子の真似して来りける。

狂女へこれこれ里人、ここへ来てたもや。

へ太神樂はそばへ寄り、太神樂へ見ればお若い女中のただ一人、お前方の様な、美しいお方の、おそばへ寄つたなら、どんな太鼓の撥が、当ろうか知れぬ。

狂女へこれこれ、そなたの背負うていやるは、そりや何じゃ。

太神樂へこれかえ、これは獅子さ。

狂女へその獅子、妾に貸したも。

太神樂へえ、これを貸してくれえ、これをお前に上げては、私が鼻の下が乾上がる。

狂女へそんならわが身、舞うて見や、

太神樂へ合点がつてん、お望みにまかせつつ、さらば神樂を囃そうか。

二上りへそもそも神樂のそのはじめ、天の岩戸の屏風の内の、天の細女(うずめ)の魂胆に、神の心を取り囃し、てれん手管の真実に、本調子へ正木のかつらよりかけて、しなだれ葛玉葛、長啼鳥の常闇に、しつぱり汗を角兵衛獅子。

御廐の喜三太)に出逢い、獅子舞を所望する。そしてその獅子舞のうちに義経に逢わせてくれと口説き泣くという内容。

安永六年(一七七七)十一月、江戸市村座で初演されたときは富本節だったが、天保(一八三〇〜四三)以後、清元に移された。曲は名曲で、神樂と獅子の三味線はいかにも田舎風な太神樂だし、クドキも狂女らしい雰囲気であっている。全体に派手な構成をとっているが、その中の静御前の哀れさが印象的である。

なお原作では、このあと夫婦狐が出て義経の無事がわかり、静御前の狂気もおつて、鞍馬に向かうところまであったが、現在ではこの上の巻のみが伝わっている。

三上りへ風の誘う花の雪、散れば狂じて柳髪、雪は飛んで散乱し、羽風に似たる白妙も、狂う狂女の姿かや。

狂女へその人に物問おう、妾が尋ぬる公達の、

へ綾の狩衣たおやかに、十六七の細眉に、鉄漿(かね)黒々と粧いし、お稚児の旅に逢う事の、もしやちらりと三日月ならば、教えてたべの里人と、うつつ涙にわけもなき。

狂女へやや何じや、我が君様は鞍馬にじや。

三上りへ鞍馬の里は、八瀬、大原、大原木買わい大原木買わい、大原女が、引く牛に、恋しき人をうち乗せて、引いて行きましよ我が故郷へ、大原木買わい、大原木買わいな。可愛い可愛いと鳴く鳥に、憎や添い寝を起した。狂女へほほほ、ほほほ、おおかし、いち足早う逃げていたか、ほほほ、笑え笑え。

本調子へ妾も人が笑わなん、さもし恥かしこの姿、小春へ残る乱れ菊、とりなり映す水鏡、御裳濯川や、八十瀬川、

太神樂へ獅子はお家のてれつくでん。

へつくづく見れば、へてんとたまらぬしなもののめ。へ誰と寝て来た乱れ髪、どこの岩戸の睦言を、問わま欲しやと寄り添えば、へもとより狂気のうろうろと、へ薙刀取つて打ちかかる。へおつと危ない鼻の先、へ受ける曲撥三尺の、剣にひやす業物は、これぞ千巻の玉鉾に、追つたてられて太神樂、逃ぐる拍子に狂う獅子、へこなたは恋の物狂い、へ狂うは獅子の冬牡丹、獅子団乱旋の、遠くとも、逢わで果てなん、へわがつまの、鞍馬の方と聞くものを、鞍馬の方は、いづくぞと、そこはかとなく、走れば走るうつつなき、止むる男を、振袖に、払う羽袖やひるがえる。へ賤のおだまきくり返し、昔を今に恋しさの、へ恋にはつばさもあるものを、添うて行きたや逢わせてと、口説いつ泣いつ正体なく、へとりすがられて太神樂、乗りかかったる灘の船、よるべかねにし風情なり。

五、河東節 邯鄲(下の巻)

邯鄲の話は、唐の李泌の「枕中記」にあり、「太平記」巻二十五には「黄梁夢事」の記事が見える。これによつて能の「邯鄲」が作られ、さらに長唄、常磐津、箏曲などにもいろいろな形で作られている。

この曲は河東節・一中節掛合曲として天保十二年(一

八四一)冬に作られたが、能の詞章を借りていることは他と同じ。ただし、下の巻とあるように、夢の中でもつとも派手なところを作曲したもので、たいへん賑やかで華やかな曲となっている。掛合曲だが、今日の演奏では河東節の部分だけをとり上げ、一中節の一部も河東節で演奏する。しかしそれだけでも、前半の派手なところと、後半の夢が覚めてからの対照があざやかで、おもしろくきかれる。

なお、上の巻は河東節だけの曲だったが、今は伝わっていない。

へ東に三十余丈に、銀の山を築かせては、金の日輪を出だされたり、西に三十余丈に、金の山を築かせては、銀の月輪を出だされたり、たとえばこれは、長生殿の内には春秋を留めたり。不老門の前には、日月おそしという心を学ばれたり。(中略)

へそも天の濃漿とは、

へこれ仙家の酒の名なり。

へ沈瀝の杯と申すことは、

へ同じく仙家の杯なり。

へ寿命は千代ぞと菊の酒、栄華の春もよろず年、君も豊かに民栄え、国土安全長久の、栄華もいや増して、なお喜びは増り草の、菊の杯とりどりに、いざや飲もうよ。(中略)

へ昼になり、

へ昼かと思えば、

へ月またさやけし。

へ春の花咲けば、

議のため、相馬の古御所に忍び込む。とそこへ将門の娘の滝夜叉姫が、鳥原の傾城如月(きさらぎ)となつてあらわれ、妖術でもって色仕掛で味方に引き入れようとする。光圀はこれを見あらわし、立回りとなるという筋。

何といつても常磐津節の代名詞のようになっている滝夜叉のクドキ「嵯峨や御室」が有名で、情緒あふれる趣きがある。しかしそのあとの「さても相馬の」の物語り、「ほのぼのと」の廓話、「一つ一夜の」の踊り地と、まことに変化に富んだ美しいメロディーが続いてあきさせない。

今日は時間の都合で、一部分を省略して演奏いたします。

へそれ五行子にありという、かの紹興の十四年、楽平県なる陽泉の、昔をここに湖の、水気盛んに浩々と、澄めるは昇る天津空、雨もしきりと古御所に、解語の花の立ち姿。

三下りへ恋はくせもの世の人の。迷いの淵瀬きのどくの、山より落つる流れの身、うきねの琴のそれならで、へ妻呼び交す雁金の、その玉章をかくばかり、色に手だれの傾城も、焦がるる人に逢い見ての、後の思いにくらぶ山、忍ぶ涙の春雨を、傘にしのいで来りける。

へ大宅の太郎は目をさまし、将門山の古御所に、妖怪変化すみかを求め、人倫を悩ます由、頼信公の仰せをうけし光圀が、しばしまどろむそのうちに、見なれぬ座敷のこのていは、正しく変化の所為なるか。

へ申し申し光圀さま。

へさてこそ変化ごさんなれ。いで正体をと、立ち寄る光

へ紅葉も色濃く、

へ夏かと思えば、

へ雪も降りて、(中略)

へかくて頃過ぎ時去れば、五十年の栄華も尽きて、まことは夢のうちなれば、みな消え消えと失せ果てて、ありつる邯鄲の枕の上に、眠りの夢は覚めにけり。

へいかに御旅人、粟の飯の出来て候、とうとう御目をさまさされ候え、さまさされ候えや。

二上りへ盧生は夢さめて、盧生は夢さめて、五十年の春秋の、栄華もたちまちに、ただ茫然と起き上がりて、さばかり多かりし、女御更衣の声とききは、松風の音となり、宮殿楼閣はただ邯鄲の仮の宿、栄華のほどは五十年さて夢の間は粟飯の、一炊の間なり、不思議なりや計り難しや。(中略)

本調子へ南無三宝、よくよく思えば出離を求むる知識はこの枕なり、げにありがたや邯鄲の、夢の世ぞと悟り得て、へ望みかなえて帰りけり。

五、常磐津将

かど

(忍寄恋曲者)

常磐津の代表曲。天保七年(一八三六)七月、江戸市村座初演。宝田寿助作詞、四世岸沢式佐曲。

源頼信の命を受けた大宅太郎光圀が、平将門の余類詮

圀、女はあわて押しとどめ、

へああ申し、様子いわねばお前の疑い、私や都の鳥原で、如月という傾城でござんすわいなあ。

へやあ、心得難きその一言、波濤を隔てしこの国へ、傾城遊女の身をもつて、来り住むべきいわれなし。よしまた都の遊女にせよ、ついに見もせぬその方が、何ゆえ我をと不審の言葉。

へさあお尋ねなくともお前の胸、晴らすは過ぎし春の頃、へ何と、へ申し。

へ嵯峨や御室の花盛り、浮気な蝶も色かせぐ、廓の者に連れられて、外珍らしき嵐山、へそれ覚えてか君様の、袴も春の朧染め、朧気ならぬ殿ぶりを、へ見染めて染めて恥かしの、森の下露思は胸に、へ光圀様ということは、その折知って明暮に、女子の念が今日の今、届いて嬉しいこの逢う瀬、疑い晴らして下さんせ、やいのやいのと取り纏り、赤らむ顔の袖屏風。光圀わざとうちとけて、

へいかさま切なるおことが心底、さほどに思う愛情を、捨つるはかえって本意ならず、疑念はさっぱり晴れたれども、武辺修業のわが身の上、望みを果さばともかくもそれにつけてもいにしえの、東内裏の莊嚴を、思い出だせば、おおそれよ。

へさて相馬の将門は、へ威勢のあまり謀叛とともに、企て並べし大内裏、驕者のふるまい都に聞こえ、朝敵討手の三大将、頃は二月の百千鳥、まっさきかけて押し寄

する。数度の戦さも辛島に、集まり勢の悲しさは、風に
残んの雪なだれ、むらむらばつと吹き散つたり。平親王
が最後の戦、見よや見よやと夕月の、鹿毛なる駒に打
ち乗つて、向う者をば拝み打ち、立ち割り、ほろ付け、
車斬り。かくと見るより上平太が、放つ矢先に将門は、
こめかみ篋深に射通され、馬よりどうとあえなき落命。
寄せ手は勇む勝鬨と、今見る如く物語る。

へ思えば無念と如月が、齒を喰いしげる忍び泣き、さこ
そと光圀詰め寄つて、へ合点の行かぬ女がふるまい、今
合戦の様子を聞き、しきりに催す落涙はと、見とがめら
れてそらさぬ顔。へほほほ……、何の私が泣くもので、
泣いたというは、おおそれそれ、可愛い男に別れの鶏鐘、
後朝告ぐる朝雀、雀が泣いたといふこといなあ。

へほのぼのと、雀囀る奥座敷、燈火しめす男ども、へ屏
風一重のそなたには、まだ陸言の聞こゆれど、へ我は見
足らぬ夢を裂き、はや後朝と引き締める。へ帯隠さるる
戯れも、へ憎うはあらぬ移り香に、また盃の数ふれて、
三の切れたる三味線も、弾かるるほどは弾いて見ん、仇
し心の仇枕。へ交さぬ先もあるものを、去なば去なんせ
よしやただ、ひとり浮き身を数え唄、廓の手管に紛らか
ず、はずみに落せし錦の御旗。へこりやこれ、たしかに、
へいやそれは、へそれとは、へそれ、へそれそれぞれ、
そつこでせい。

へ一つ一夜の契りさえ、二つ枕の許しなき、三つ三重四
重まわり気は、いつまで解かぬ常陸帯、六つ酷いと思ひ
はせいで、七つの鐘も恨めしや、なまめかし。

明治二十年六月九日の夜、日本橋浜町二丁目の横丁で、
近くの待合酔月楼の女将花井お梅が、番頭峰吉こと八杉
峰三郎を、怨恨のため板場用の小出刃で刺し殺した。そ
の夜のうちにお梅は自首、翌年三月に無期徒刑の判決が
きまつて収監された。

この事件は当時大評判となり、東京絵入新聞は「花井
於梅酔月奇聞」という続き物を連載した。その記事の一
節をアレンジして新内化したのがこの曲で、へ向うへち
らちら小提灯」など、原文のままのところが多い。

へうきふし繁き……」のお梅のクドキがいいところで、
へ向うへちらちら小提灯」からほろ酔いの峰吉のせりふ
に、新内流しの手があらぬいになり、雰囲気をもし出
す。上調子が小バチを使って高音をきかせるのも一つの
特色。殺しの場面へと盛り上げる作曲の巧みさはさすが
である。

なお、時間の都合で、前半とお梅のクドキのあとを省
略いたします。

へ行く水の（中略）へお梅はあとを見送つて、（中略）
梅へああ思えば思えば私ほど、ほんに因果な者はない。

幼ない時に貰われて、養父のために糸竹の、
へうきふし繁き三筋の流れ、辛い座敷の折合に、笑うは
結句泣くよりも、悲しいことのたびたびに、ほんの親た
ちあるならば、こうしたことはあるまいと、思う心の通
じてや、四五年前に両親に、不思議に逢うて嬉しやと、
思う間もなくこの苦勞、何の報いか悲しやと、女心のく
どくどと、口説き歎くぞ哀れなり。（中略）

へ向うへちらちら小提灯、酔月という番傘を、阿弥陀に

へさてこそさてこそ、相馬錦のこの旗を、所持なすから
は問うに及ばず、将門が忘れ形見、滝夜叉であろうが。
へいや知らぬ、覚えはないぞ。

へやあ、覚えなるとは卑怯の一言、肉芝仙より伝わりし、
蝦蟇の妖術習い覚え、この古御所に隠れ棲むこと、叡聞
に達せし上は、もはや逃れぬおことが身の上、本名乗
つて降参なせ。

へちええ残念や、口惜しや、かくなる上は何をか包まん、
まこと我こそ平親王将門が娘滝夜叉なるわ。
へさてこそな。
へ一器量ある汝ゆえ、命を助け味方にと、思う心が仇と
なり、見現わされし上からは、習い覚えし妖術にて、光
圀そちが命を絶つ、覚悟なせ。
へ何を小癩な。
へ怒れる面色たちまちに、柳眉逆立ち吐く息は、炎とな
つて焰々たる、妖術魔術の業通に、さすがの勇者もたじ
たじたじ、梢木の葉のさらさらさら、魔風とともに光圀
が、襟髪つかんで宇宙の争い、怪し恐ろし世にうとう、
時を絵本の忠義伝、歌舞伎に残す物語、拙き筆に書き納
む。

七、新内花井お梅（大川端）

（梅雨衣酔月情話）

明治二十一年三月、五世富士松加賀太夫作曲。

かつぎ峰吉は、よろよろしながら、へ、ウー、歩み来
る。

峰へエ、ウー、いやもう人間というものはいろいろに
化けるものだ、俺ももとはれつきとした貧乏人の御子
息様だ、若え時から堅気が嫌い、気儘氣隨の放埒に、
身を持ちなしたその末が、役者の家の男衆から、姐さ
ん方の箱回し、やれ峰どん、それ峰吉とこき使われ、
へへ……いやもうばかばかしいと思う内、運の来たの
か知らねえが、今じゃあまあ、この浜町河岸の酔月楼
の番頭様とまで成り上つたが、これから先が一つの思
案、どうかまあ、あの酔月の親父をだまし込み、花井
の家ア俺が手に入れ、いやがおうでも行く行くは、あ
のお梅さんは俺が女房、とそう行きや、へへ……うま
いな。

へええうめえなど、うぬばれうぬばれ、ひよろひよろと、
石につまづき、提灯消えて真の闇、お梅は声かけ、
梅へおい、峰どん、峰どん。へと呼び止められて立ちど
まり、

峰へや誰だ誰だ、大層らしい、峰どん峰どんと俺を呼ぶ
のは、だだ誰だ。

へとすかしながめてびっくりし、さてはと思えどそしら
ぬ振り、顔見合せて、
峰へやあお梅さん、じゃねえおかみさん、どうしたんで
すねえ、お前さんがうちへ帰らねえので、親指が大層
立腹、そしてまあ今頃、どこからお帰りなんですわ。
梅へあい、どこから帰ろうとも、私の家へ私が帰るんだ

から、そんな詮索はいらないよ、また何時に帰ろうとも私の自由、だがね、家で話のできない事があるんだから、それでここに待っていたのさ。へと聞いて峰吉、まじめ顔

峰へえええ、そりやお梅さん、ほんまかえ。してみりや男振りにはよらぬものかいな。へと、しなだれかかるを突き放し、

梅へおい峰どん、お前はまあ、あんまりな人だねえ。

へといわれてもじもじ頭をかき、

峰へもし姐さん、何で私があんまりなんですえ。

梅へあれさ、大きな声をするには及ばないよ、白ばつられても私はみんな知っているよ。

峰へ何の事だか知らねえが、知っているとはどういう訳を。

梅へさ、訳はお前の胸にある。女と思いいあなどって、あることないこと親たちへ、吹き込む故に家のもめ、私の留守を幸いに、親をだましてあの家を、乗っ取った上私まで、なくさむ心であろうがな、ええ恩知らず人でなし。

へと、はつたと睨むその有様、角目立ったる形相に、峰吉も気味悪く、

峰へもうし姐さん、そんな難題をいわれちゃあ、この峰吉が迷惑だ、恨みがあるなら家でゆっくり聞きましょう。

へと夜更けさふけに往来で、どうする気だと突きとばせば、へとどうするものかこうすると、武者ぶりつくを振り払い、

構成は、前弾―前唄(四首)―手事―後唄(二首)というもので、箏は古今調子、素直な明るい感じの曲で、今日の演奏会の最後を飾るのにふさわしい曲といえよう。なお、手事初段のカカリは「八重衣」の曲風をとったものである。

一、鶯の谷より出づる声なくば、春来ることを誰か知らまし。

二、み山には松の雪だに消えなくに、都は野辺の若菜つみけり。

三、世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし。

四、駒並べていざ見に行かむ故郷は、雪とのみこそ花は散るらめ。

(手事)

五、我が宿に咲ける藤浪立ちかへり、すぎがてにのみ人の見るらん。

六、声絶えず啼けや鶯ひととせに、ふたたびとだに來べき春かは。

もうこれまでと峰吉が拳搦んで振り上ぐれば、こなたもすかさず立ち上り、かねて隠せし光り物、取るより早く背打ちの手もと狂うて思わずも、脇腹ぐつと差し通せば、不意の深手に、

峰へあ、あ人殺し、人殺し、人殺しだ。

へとという声は、川にひびいて物凄く、また降り出だす大雨に、うちまじりたる霊霊、あ、あ、人殺し、人殺しだと峰吉が、苦痛ながらも逃げ回る、へ日頃の無念思い知れと、恨みは深き川端に、浮名を流す酔月情話、そのあらましを富士松の、節に合せて書き残す。

八、三曲春の曲

幕末の頃、名古屋の吉沢検校作曲。この曲は「夏の曲」「秋の曲」「冬の曲」「千鳥の曲」とともに古今組といわれる。

当時の箏曲が三味線を主とした技巧的なものだったの、それに対して古雅で簡素な組唄形式の曲を作ったのが、この古今組。歌詞は『古今集』からとり、技巧的な華やかさをやめて、古典復帰の精神に基づいていた。ところが明治になって、京都の松坂春栄が古今組全部(「千鳥の曲」は別)に、派手な手事と替手作曲増補して加えた。いずれも華やかな美しい旋律で、原作の意図とはちがったものになったが、演奏効果があがるころから、かえってはやされるようになった。

御礼 邦楽連合会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。何かと不行届の点もありましたでしょうが、お許しを願ひまして、どうぞごゆっくりとお楽しみ下さいませよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにして邦楽を愛好して下さる皆様に、まとまって鑑賞していただく機会は、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうぞ続けて邦楽に交らぬ御最良をいただけますようお願い申し上げます。

今日おきき下さいました御意見や御感想などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、重ねてお願いを申し上げます。
ありがとうございます。